



郡市長がさまざまな現場を訪問し
市民の皆さまの活動の様子な
どをお伝えします

先月に引き続き、地域の自主防災活動の担い手である仙台市地域防災リーダー（SBL）の皆さんと懇談した模様をお届けします。

日頃のつながりが生きる

いつ起こるか分からない自然災害。3人のSBLの皆さんは平常時からの一人一人の備えはもちろん、地域を巻き込んで防災対策を進めることも大切だと言います。泉区高森東地区の安保文尋さんは「災害時に町内会役員が必ずいるとは限りません。誰でも避難所を開設できるように手引書を役割ごとに作成し、防災倉庫に備えています」と話します。また、消防署や地域包括支援センターなど関係団体との会議も定期的に開催しているそう。

宮城野区福住町の大内幸子さんは「出会いとコミュニケーションを大切に活動してきました。私は学校ボランティアもしていて、普段から学校の先

生方に接しています。お互いを分かっていることで、避難所運営にも協力いただきやすくなっています。みんなが集まる夏祭りも防災には大事。そうした機会を通して、支援が必要な方とも顔を合わせて、日頃から地域で見守る、これが災害を乗り越える力になると確信しています」と話します。若林区荒町地区で活動する若生彩さんも「いざというときに知らない人を助けるのは難しい。顔見知りだからこそ支え合えると思います。社会学級や被災された方が集うサロン活動などに携わる中で、ネットワークを築いていきたいですね。世代を超えた優しいつながりが広がれば」と続けます。常日頃の準備と、人と人のつながり、防災は日常の延長にあるものだと感じます。

次世代につなげるために

震災を知らない世代が増える中、いかに経験や教訓を伝えていくかということも課題です。大内さんは「子どもたちに伝えていくため、親子防災まち歩きを行い、危険な箇所を確認しました。その成果を『福住町防災パンフレット』にまとめ、皆さんに配布しました」と話します。手に取りやすい大きさで、いつでも災害リスクや備えを確認できる、素晴らしい取り組みです。

若生さんは「学ぶことは行動の原動力だと思います。私もさまざま所で防災



講座に関わっていますが、普段から自分の身を守るすべを周囲に伝えていくことで『それはもう知っているよ』と皆さんに言われるようになればと思います」と語ります。皆さんは子どもたちに楽しみながら防災を学んでほしいと、空き缶で米を炊くなどのサバ飯作りや防災の視点を入れた自然観察などの取り組みも実践されています。

「SBLは地域を見守り続ける存在。地域の力を信じて、しっかりと活動していきたい」と話す安保さん。SBLの仲間を増やしていきたいと、皆さんは笑顔で語ってくれました。

防災はまち・ひとづくり

養成を開始してから11年。SBLの皆さんが積み重ねてきた取り組みが着実に実を結び、地域防災を支える大きな力となっていることを実感しました。防災の推進には、多様な主体が関わり、互いを理解し、協力し合うことが大切。それはまちづくりも同じ。本市としても、SBLの養成を進め、皆さんの取り組みをもっと発信していきたいと思えます。

今後SBLの皆さんと手を携えながら、災害に強いまちづくりに向けて取り組んでまいります！



▲左から安保さん、大内さん、市長、若生さん
※SBLの募集は16ページをご覧ください

